

# 平成二十九年 札幌日本大学中学校

## 入学選抜試験

国語

試験時間

60分

### 注意

- 一、指示があるまで、問題冊子さつしを開いてはいけません。
- 二、答えは、解答用紙に記入してください。問題は、☐一から☐二まであります。
- 三、試験監督かんとくの先生の指示に従したがって、試験を開始してください。
- 四、試験の途中とちゅうで、トイレに行きたくなったり、気分が悪くなったりした場合は、手をあげて試験監督の先生の指示を受けてください。
- 五、試験開始の指示があつてから、解答用紙に「受験番号」「氏名」を記入してください。
- 六、解答用紙には、解答以外を記入しないでください。
- 七、試験が早く終わっても、周囲を見回したり、横を向いたりしてはいけません。試験監督の先生から注意を受けることがあります。
- 八、机の上には、筆記用具以外は置いてはいけません。風邪かぜなどにより、ティッシュペーパーを使用したい場合は、予め試験監督の先生に申し出てください。
- 九、本文の中からぬき出す場合は、特に指示がない限り、句読点や「」等の符号ふごうも一字として数えなさい。
- 十、本文中の※は、本文の後ろに意味の説明があるという印です。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

小学五年生の大窪博士（ハカセ）は、昼休みの時間に二人で釣りをしたのをきっかけに、クラスメイトからうそつきだと言われているサンペイ君（ナカタ）と仲良くなります。ある日、サンペイ君をかばったことがきっかけで、博士とサンペイ君は、クラスのリーダー的存在である福ちゃんから仲間はずれにされています。二人が仲間はずれにされていることは、クラスの学級会で問題にありますが、サンペイ君は、自分たちは福ちゃんから仲間はずれにされていないと、クラスメイトや担任の柿崎先生の前で言い張ります。

次の文章はこれに続く場面です。

放課後、博士とサンペイ君が校門から出ると、福ちゃんが後を追ってきた。「ちょっとこっちへ」と道端の自動販売機の脇に引張っていった、口元を震わせながら、「なんで、ナカタがおれをかばうんだべ」と詰問した。

① かばったわけではないのだよ」とサンペイ君が返した。

「かばったべ」

「かばってはいないのだ」

なんだか押し問答になってくる。

「昼休み、ナカタがどこにいるかみんな知ってるべ。あんな小さな池に大きな魚なんかいるもんか。馬鹿じゃねえのか」

「馬鹿じゃないのだ。あそこにはヌシがいるのだ」

「おれが先生にチクるなって言っておいてやらなきゃ、どうなるか分かってるべ」

福ちゃんは、やけを起こしたような言い方だった。

「かばってくれて、ありがとう。でも、ぼくはきみとはあまりかかわりたくないのだ。だから、無視されると逆にありがたいのだ」

「そうか、わかった。ならいい」

福ちゃんは、くるりと背中を向けた。

「ねえ、いいの、あんなこと言って」博士はサンペイ君を見た。

「ああ、これでいいのだ」

（あ）

博士にはそうは思えなかった。去っていく福ちゃんの背中を追いかけた。

「ごめん、福ちゃん、サンペイ君はあだから……」自分でもなぜ謝っているのか分からなかったけど、つい博士は謝っていた。  
「馬鹿にしてるべ」

福ちゃんは立ち止まって博士を見た。

「ハカセも、ナカタも、おれのこと馬鹿にしてるべ」

「そんなことないよ」

「いや、馬鹿にしてる」

「してない」

ここでも□□になってしまった。

「サンペイ君はすごいんだ。福ちゃんが仲良くしてくれたら、みんなサンペイ君のこと、よく分かると思うのに。本当にすごいし、おもしろいんだから。福ちゃんが言っていた、※ほら話だって、本当に本当なんだから」

「本当だったら、すごいのか。おれらには関係のない話だべ。あいつも、あいつの※おじさんも、勝手に月でも火星でも行けばいいべ」

博士には福ちゃんがなんで、そんなにサンペイ君を（A）の敵かたきにするのか分からなかった。先生だって夢を見ることはいいいことだって言うじゃないか。サンペイ君が大きなことを言ったりするのって、そんなに悪いことなんだろうか。

「福ちゃん、おかしいよ。福ちゃんってもっと分け隔てへだてないんだと思ってた。でも、今はみんな福ちゃんが怖こわいんだよ。だから、ぼくたちに話しかけられない。福ちゃんはそんなにいいの？」

② 福ちゃんのはつとした顔で、博士を見た。

「ハカセにそんなこと言われるとはなあ……」と小さく呟ささやいた。「おれ、頭、悪いし、おやじは家を継つげって言っし、たぶん

高校出たらそうなるんだべき。けど、ナカタは勉強すりゃあ、一番になれるやつだ。でも、やらん。それで一人でスカしてる」  
「福ちゃんは、クラスの人気者じゃないか。みんな福ちゃんが好きだし、いるだけでばつと明るくなる。サンペイ君のこと、気にすることなんてないんだよ」

「そうだべか……」

③ 福ちゃんは唇を噛んでいた。博士には分からなかったけど、福ちゃんにとっては大きなことなんだというのが伝わってきた。サンペイ君はもう帰ってしまっていたので、博士はサンペイ君の家に向かった。

離れの部屋にはサンペイ君はいなかった。たぶん川に行ったのだと思って博士はいつものポイントに向かった。はたして、サンペイ君は一人で釣り糸を垂れていた。

「やあ、ハカセ君」サンペイ君が後ろ向きのまま言った。

「福ちゃんと仲直りした方がいいと思うよ」博士はいきなり核心に切り込んだ。

「やつはぼくが気に入らないのだよ。瓢箪池のヌシのことだって、やつは信じようとしなからね。こっちはおじさんが釣りかけて、糸を切られるのをこの目で見ているのだ。ヌシはぜったいにいるのだ」

( い )

「ぼくはクラスのみんなにサンペイ君のこと、もっと知ってほしいんだよ。こんなにすごいし、おもしろいの、みんな全然知らないんだ」

「そんなことはいいだよ、ハカセ君。ぼくたちは遠くにいくのだから、小さな教室にかかわることはないのだ」

「でも、みんなと仲良くやれた方が、楽しいじゃないか。サンペイ君はおかしい。なんか逃げてみたいだ」

言ってしまった後で、④ 博士ははつとして口に手を当てた。

サンペイ君の肩が震えていた。水面の浮きにアタリが来ているのに、竿を動かそうともしない。

博士は話しかけられずに、じっと背中を見ていた。

しばらくしてサンペイ君が大きく息を吸い込んだ。

背中を向けたまま、「ハカセ君、帰ってくれたまえよ」と威圧的に言った。

博士はそのままとぼとぼと家路についた。

(中略)

三月になったばかりの昼休み、博士は例によって一人で本を読んでいた。

昼休みが半分過ぎたことを告げるチャイムが鳴った時、廊下をあわただしく走る足音が聞こえてきた。

「ハカセ君、急いで来てくれないか」

(B) を弾ませた声に振り向くと、サンペイ君が教室の入口のところに立っていた。

突然のことで驚いたのが一番だったけれど、同時にすぐうれしくて、博士は「いいよ」と立ち上がった。  
「とにかく急いで来るのだ。ハカセ君は是非見に来るべきなのだ」

(う)

後についていく時、サンペイ君の服にあちこち泥がついていることに気づいた。

サンペイ君は校舎を出て、まっすぐに瓢箪池に向かった。池のほとりには釣り竿が投げ出されていて、大きな網が水の中に半分浸してあった。泥にまみれた取っ手をむんずと握み、持ち上げると、水が飛び散るのも構わずに大きく振って博士の前に差し出した。

博士の目は網の中に吸い寄せられた。黒っぽい銀色の魚が、木漏れ日を反射しながら力強く身をくねらせていた。

「ヌシなのだ。水がぬるんで、やっと釣れたのだ」

(え)

いつものように淡々と言おうとしているけど、どこことなく声がうわずっていた。

「すごい……」博士はひとこと言って黙り込んだ。

本当にすごいと思った。サンペイ君はずっと「ヌシ」のことを話していたけれど、ここまで大きく立派なものだなんて想像していなかった。

ゲンゴロウブナ。たしか、そうだ。顔の後ろから背びれにかけてこんもりと盛り上がったたくましい形をしていて、なによりも大きかった。たぶん、五十センチ近くはあるんじゃないだろうか。サンペイ君や博士の体の幅よりもずっと大きい。サンペイ君は嘘をつかない。博士はなんだかじーんとしてしまって、その場に立ちつくした。遠くで午後の授業が始まる五分前のチャイムが鳴っていたけれど、そのチャイムの意味さえ気がつかなかったほどだ。

「さあ、ハカセ君、そろそろいくのだ」

サンペイ君はたも網を水に戻して、服に付いた乾いた泥を払った。

「ねえ、サンペイ君、この魚どうするの」博士は（C）のこもった口調で言った。

「そうだな。放課後まではこうしておくとして、とりあえず飼ってみるかもしれないな。でも飼いきれないなら魚拓を取るのだ。こいつは魚拓を取るのに値するのだよ。おじさんが帰ってきたら見せなければならぬのだ」※ぎょたく

「みんなには見せないの」

「なぜ、そんな必要があるのだい。ぼくはヌシを釣っただけで満足なのだ」

博士は小さくため息をついた。⑤ サンペイ君はいつもそうだ。

近くに銀色のバケツが転がっていた。博士はそれで池から水をくみ取り、たも網を上げて中にそいつを落とした。バケツはいかにも小さかったけれど、体を少し丸めるようにしてなんとか収まった。

「なにをするのだね、ハカセ君」

サンペイ君が少し慌てた口調で言った。

「いいから、いいから」

博士はバケツを持って走り始めた。水がちゃぶちゃぶ撥ねて指に触れ、⑥ 冷たいのになぜか気持ちよかった。

サンペイ君はほら吹きじゃない。本当にすごいんだ。

心の中でつぶやきながら、ぐんぐん走った。こぼれた水は指だけじゃなく、シャツやズボンまで濡らしたけれど、それも気にならなかった。

教室の扉をガタンと開けたのは、午後の授業が始まった瞬間だった。

※大窪 どうした。遅刻だぞ。それにどうした、※中田まで——

柿崎先生の声を無視して、博士は大声を出した。

「ヌシやでー、ヌシが釣れたでー、サンペイ君が釣ったんやでー」

みんながぼかんと口を開けてこっちを見ている。

〈注〉

※詰問…問いつめること。 ※ほら話…うその話。

※おじさん…サンペイ君のおじ。世界を飛び回っている。 ※たも網…魚をすくう小型の網。

※魚拓…魚の表面に、墨・絵の具をぬり、和紙や布をその上にかぶせて魚の形をすり写すこと。

※大窪…博士のこと。 ※中田…サンペイ君のこと。

問一 (A) (C) に入る適当な言葉を、それぞれ漢字一字で考えて答えなさい。

問二 次の一文が入るのに、最も適当な場所を (あ) (え) から選び、記号で答えなさい。

ちよつと高飛車で、なのに憎めない、言葉を交わさなくなる前とまったく同じサンペイ君だった。

問三 — 線部①「かばったわけではないのだよ」とありますが、サンペイ君の福ちゃんに対する気持ちが表示している一文を本文中から二十五字以内で探し、最初と最後の五字をぬき出して答えなさい。ただし、句読点も一字として数えなさい。

問四 文中の   にあてはまる四字の言葉を、本文からぬき出して答えなさい。

問五 〰〰線部「核心」の意味と同じ意味を持つ言葉を、次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 決心      イ 無心      ウ 関心      エ 中心      オ 本心

問六 — 線部③「福ちゃんは唇を噛んでいた」とありますが、ここでは福ちゃんは、サンペイ君に対してどのような気持ちを抱いていますか。四十五字以内で答えなさい。

問七——線部②、④は、それぞれどのような様子を表していますか。これを説明した次の文の（ア）～（エ）に当てはまる登場人物を、次のA～Cから選んで記号で答えなさい。同じ人物の名前を何度答えてもかまいません。

A ハカセ      B サンペイ君      C 福ちゃん

②は、（ア）に真実を言い当てられて、（イ）がとまどう様子を表しており、  
④は、（ウ）に対して正直に言い過ぎてしまったことを（エ）がとっさにこうかいする様子を表している。

問八——線部⑤「サンペイ君はいつもそうだ」とありますが、これはどういうことを言おうとしているのですか。次の文の（ ）にあてはまる内容を考えて、十五字以上二十字以内で説明しなさい。

サンペイ君はいつも（

）ということ。

問九——線部⑥「冷たいのになぜか気持ちよかった」とありますが、それはなぜですか。ここでの博士の心情をふまえて理由を五十字以内で説明しなさい。

問十 本文における表現上の特色として誤っているものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 登場人物一人ひとりの口調を持ちよう付けることで、それぞれの性質が際だ<sup>きわ</sup>って表現されている。  
イ 短い会話を多用することで、それぞれの場面の流れがリズム良く生き生きとえがかれている。  
ウ 複数の登場人物の対立する心情をわかりやすく伝えるために、たとえの表現が用いられている。  
エ 読者に登場人物の細かい心の動きを伝えるために、人物のしぐさがていねいにえがかれている。



二

次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

著作権の都合上、掲載を差し控えております。

著作権の都合上、掲載を差し控えております。

問一 ― 線部 a「キョウカン」b「キノウ」を漢字に直しなさい。

問二 ― 線部①「型破り」とありますが、記事中で紹介されている救急クリニックはどのような点が「型破り」なのか。これを説明した次の文のア～エに当てはまる言葉を本文中から探し、ぬき出して答えなさい。ただし、アは七字で、イ～エは一字で答えなさい。

このクリニックは（ア）クリニックにもかかわらず、外来診療の受け付けが午後（イ）時から（ウ）時と（エ）時間であり、さらに、夜中も翌日午前9時まで救急患者を受け入れているという点が型破りである。

問三 ― 線部②「『たらい回し』を防ぐ」とありますが、病院が救急患者の受け入れを断る理由を、記事中の図表を参考に三つ答えなさい。ただし、文末は全て「から。」にしなさい。また、このクリニックが「たらい回し」を防いでいるのは、このクリニックの医師がどのような姿勢をもつからだと考えられますか。文末を「姿勢。」という形にして三十字以上四十字以内で答えなさい。

問四 ― 線部③「コンビニ受診」とありますが、「コンビニ受診」の問題点は具体的にどのようなことですか。記事を参考に四十文字以内で答えなさい。

問五 ― 線部④「同様の医療機関」とありますが、この医療機関としてあてはまらないものを一つ選び、記号で答えなさい。  
ア 受け入れ患者のうち、軽症者には治療をし、手術や入院が必要な患者には応急処置をした上で適切な病院へ送るという医療機関。

イ 患者が身寄りのない高齢者の場合、専門の大きな病院をすすめるという医療機関。

ウ 受け入れた患者の症状が腕の骨折だったと分かった場合、医師が大学病院に受け入れ要請の電話を入れる医療機関。  
エ 身寄りのない高齢者から酔っ払いまで、何力所も断られた患者でも受け入れる医療機関。

問六 本文および図表の内容と合致しているものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 大きな病院では、多くの医師を抱えているため、救急患者が来た場合は軽症、重症を問わず受け入れている。

イ 傷病者が救急車で病院に運ばれる場合、病院側の都合により、次から次へと別の病院に搬送されてしまう可能性がある。

ウ 医師不足などの影響で、埼玉県内では、救急医療を専門とした個人クリニックを建てる医者が増えてきている。  
エ 患者はおなかが痛いとき、それが便秘なのか、急性虫垂炎なのかを判断してから病院にいくべきである。

問七 — 線部⑤「そのためにはうちがもう少し成功しないと」とありますが、この場合、このクリニックがどうなっていくことが「成功」だと思いますか。あなたの考える「成功」の内容を答えなさい。

問八 救急車の「たらい回し」を防ぐにはどうしたらよいと思いますか。総理大臣になったつもりで、提案する内容を答えなさい。

## 下 書 用 紙